

## 1月31日文化知普及協会ウェブセミナー報告

2021年1月31日 境 毅（文化知普及協会理事）

### テレストリアルからのグレート・リセット

#### 目次

1. コロナ禍で進む資本によるグレート・リセット
2. ショック・ドクトリンとは
3. テレストリアルからのグレート・リセットの可能性
4. 今なぜラトゥール
5. テレストリアルの発見
6. エコロジー運動や左派の運動の限界
7. 新しい政治の原理
8. テレストリアルからのグレート・リセット構想

#### あらすじ

コロナ禍は、資本家側にとっては、グレート・リセットのチャンスです。ナオミ・クラインが警告したショック・ドクトリンが目の当たりに進行しています。資本家側のグレート・リセットは、国連のSDGsも内包した形での第四次産業革命で、従来の生産様式の根底からの変革がめざされています。それによる新たな需要の喚起と資本蓄積の新たな段階を構想しているのです。

テレストリアルとは、ラトゥールが、名著『地球に降り立つ』で提案したもので、資本に対抗する土に根差した人々、および非人間（動植物といった生物だけではなく岩石や土壌なども含むもの）で、人間の生存基盤のことです。このテレストリアルからのグレート・リセットを、だれでも取り組める社会運動の旗印として、資本に対抗できる新しい運動の構想を描きだします。

#### 1. コロナ禍で進む資本によるグレート・リセット

##### 1) 第四次産業革命とは

第四次産業革命とは、ダボス会議議長クラウス・シュワブの一連の著作がわかりやすいです。

『第四次産業革命』（日本経済新聞出版社、2017年）

『第四次産業革命を生き抜く』（日本経済新聞社、2019年）

『グレート・リセット』（日経BPマーケティング、2020年10月）

シュワブの、第四次産業革命について、彼の説明を簡単に紹介しておきましょう。

第一次産業革命は、1760年～1840年で、蒸気機関の発明とそれを使用した鉄道網の建設でした。

第二次産業革命は、19世紀後半から20世紀初頭で、電気と工場での流れ作業による大量生産の時代です。

第三次産業革命とは、1960年から20世紀末までで、コンピュータ革命、デジタル革命の進行でした。

そして、第四次産業革命とは、デジタル経済の上にモバイル（スマホ）革命、AI、IoT、新素材の開発等があげられ、スマートシティ構想が進められる時代です。

## 2) グレート・リセットとは

新著『グレート・リセット』（日経ナショナルジオグラフィック社、2020年10月）は、ダボス会議会長クラウス・シュワブと、ティエリ・マルレの共著で、2020年7月に書かれたものです。クラウス・シュワブは、数年前から第四次産業革命による社会の大転換を予測してきましたが、その予測を、コロナ禍で前倒しにして実現しようという構想です。

その目次を上げておきましょう。

### 【目次】

#### イントロダクション

##### 1. マクロリセット

1.1 概念の枠組：現代社会をあらわす三つのキーワード。1.2 経済のリセット。

1.3 社会的基盤のリセット。1.4 地政学的リセット。1.5 環境のリセット

1.6 テクノロジーのリセット。

##### 2. ミクロリセット（産業と企業）

2.1 ミクロトレンド。2.2 産業のリセット

##### 3. 個人のリセット

3.1 人間らしさの見直し。3.2 心身の健康。3.3 優先順位を変える

このように、大きくは経済、社会、地政、環境、技術、中間項としては企業、そして末端の個人に至るまでがリセット（組み直し）の対象とされています。

## 3) ダボス会議とは

ダボス会議（世界経済フォーラム）は、1971年にクラウス・シュワブによって創設された国際機関で、毎年1月にスイスのダボスで年次総会を開いています。私は、『モモ』の作家エンデが参加したことは彼の著作で知っていましたが、今年は、「ドナルド・トランプ米大統領と、トランプ氏の演説に耳を傾けるスウェーデン人高校生環境活動家のグレッタ・トゥンベリさん（2020年1月21日撮影）」という記事がありました。各国政府の政治家や、大企業の経営者だけでなく、時の人も招待しているようです。

今年はコロナ禍で1月のダボスでの年次会議は5月に延期され、シンガポールで行うという報道がなされています。そして1月末にオンラインで各国首脳の報告があり、菅首相は五輪を夏に絶対やると発言したそうです。

## 2. ショック・ドクトリンとは

ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』（岩波書店）は、2005年にアメリカ南部を襲ったハリケーン・カトリーナの被災地を訪問して取材した記事から始まります。この惨事で、被災者たちが住宅を失って、避難所で生活しているまさにその時の、共和党下院議員や、不動産業者の発言が記録されています。

「これでニューオーリンズの低所得者用公営住宅がきれいさっぱり一掃できた。われわれの力ではとうてい無理だった。これぞ神の卸業だ」（『ショック・ドクトリン』、2頁）

「私が思うに、今なら一から着手できる白紙状態にある。このまっさらな状態は、またとないチャンスをもたらしてくれている」（同書、2頁）

そして、新自由主義の提唱者である、ミルトン・フリードマンは、次のような記事を書いたのです。

「ハリケーンはニューオーリンズのほとんどの学校、そして通学児童の家々を破壊し、今や児童生徒たちも各地へと散り散りになってしまった。まさに悲劇というしかない。だが、これは教育システムを抜本的に改良するには絶好の機会でもある」（同書、3～4頁）

そして、フリードマンの提案した公教育の民間運営のチャーター・スクールへの移行は恐ろしいスピードで進められました。

「ルイジアナ州の教育改革者が長年やろうとしてできなかったことを（中略）ハリケーン・

カトリーナは一日で成し遂げた」(同書、5頁)

この後、ナオミ・クラインは、ミルトン・フリードマンが、1962年に出版した『資本主義と自由』(日経BP社)で述べている次の文言を引用しています。

「現実の、あるいはそう受けとめられた危機のみが、真の変革をもたらす、危機が発生したときに取られる対策は、手近にどんなアイディアがあるかによって決まる。われわれの基本的な役割はここにある。すなわち現存の政策に代わる政策を提案して、政治的に不可能だったことが政治的に不可欠になるまで、それを維持し、生かしておくことである」(同書、6～7頁)

今、コロナ禍で教育制度の見直しは課題となっています。そして日本の政権は、日本における新自由主義政策の権化のような竹中平蔵と、それを師と仰ぐ菅首相です。コロナ禍という惨事に便乗して何をやろうとしているのか、注目しておく必要があります。

### 3. テレストリアルからのグレート・リセットの可能性

コロナ禍という惨事に便乗し、第四次産業革命を前倒ししてグレート・リセットをしようという資本と国家の、ショック・ドクトリンはうまく運ぶのでしょうか。デジタル経済のもとではSNSを通して誰もが発言できます。また、無料のインターネット上のプラットフォームを利用して、だれもが自営業を始められます(ポール・メイソン『ポストキャピタリズム』参照)。このような事態を考慮すれば、人びとの生活圏からのグレート・リセットの可能性が開けてくるのではないのでしょうか。ラトゥールの提起に従って、テレストリアルからのグレート・リセットをめざして活動していく際の指針を模索していきましょう。

### 4. 今なぜラトゥール

ラトゥールは、人類学的手法で現代社会を考察し、近代思想、近代憲法、自然科学、社会科学、つまりは近代の社会契約、これらすべての近代知のリセットを試みた人です。今回は次の諸点にわたってラトゥールからの引用文をあげて、その解説を行います。この報告では、解説がついていますが、セミナー当日はアドリブで解説する予定です。項目は次のように分けました。

- 1) 『地球に降り立つ』の勧め
- 2) ラトゥールの紹介
5. テレストリアルの発見
6. エコロジー運動や左派の運動の限界
  - 1) エコロジー運動の問題点
  - 2) 左派、右派、第三の道という座標軸のリセット
  - 3) ローカルとテレストリアルとの違い
  - 4) 階級的視点の限界
7. 新しい政治の原理
  - 1) 生産システムから発生システムへ
  - 2) テレストリアルからの政治の再組織化

#### 1) 『地球に降り立つ』の勧め

ラトゥールの『地球に降り立つ』(新評論)は、現在進行中のコロナ禍の終結以後の世界を解き明かすカギの一つを提供しています。それはテレストリアルの発見であり、そのテリトリーにもとづく新しい政治の提案です。それは、いま、ここで、誰にでもできる実践の提案です。異論がある論点もありますが、私が注目したのは政治についての次のような指摘です。

「見た目とは違い、政治の要は政治意識ではなく、地球の形と重さなのである。政治の機

能はそれに反応することだ。

政治は対象、賭金、状況、物理的実体、身体、風景、場所につねに向けられている。いわゆる守るべき価値とは常に、あるテリトリーが抱える課題への反応である。そしてその課題を各テリトリーが記述できること、これが条件である。これこそ政治エコロジーが発見した確たる事実である。つまり、対象に適応させた政治ということだ。そのためテリトリーが変われば政治意識も変わる。」(『地球に降り立つ』、83頁)

政治についてのこのような把握は、今日の一般的な統治システムである民主主義と政党政治に代わる新しい政治の提案であると私は考えました。というのも、ラトゥールは、テレストリアル(大地、地上的存在、地球)に居場所をつくっている人々に呼びかけて、その人たちとその人たちを取り巻くモノといった諸アクターのネットワークが作り出す生活のすべてを記述し、それにもとづいて政治をつくりあげていくことを提案しているからです。ここには統治システムに一票を行使することしか許容されていない現在の政治に対する代案があります。

## 2) ラトゥールの紹介

ラトゥールは自らを比較人類学者と自称しています。そもそも人類学とは、大航海時代に地球上のいまだ知られていなかった大陸にヨーロッパ人が到達し、先住民を駆逐して植民地を作ったときに、そこに住んでいた先住民の研究が民俗学的手法で始められたことに起源を持ちます。その対象は、前近代社会であって、決して現代社会ではありませんでした。現代社会の解明には、経済学や政治学や社会学があり、最近では心理学が幅を利かせていますが、これら専門化された学問で事たれりとされていたのです。

しかし、比較人類学から出発し、サイエンススタディーズに関わってきたラトゥールは、1989年のベルリンの壁の崩壊と、同じ年になされた気候変動に対応する国際会議をきっかけに、人間だけを主体とする近代的な自然科学と社会科学の思想上の限界を突き出して、代わりに人類学的視点で、非人間やモノも含めたネットワークを分析する必要性を主張したのです。『虚構の「近代」』(新評論、2008年、原書1991年)がその成果です。

このラトゥールの提起はアクターネットワーク理論(ANT)と呼ばれていましたが、研究者を対象とした方法論が『社会的なものを組み直す』(法政大学出版局、2019年1月、原書2005年)にまとめられ、以降社会学の研究者の間で流行になっているようです。私の印象では、この方法論を実際に使って成果を出せるような研究者はまれではないかというもので、実践家の果たす役割は大きいのではないかというものでした。また、ラトゥール自身がこの方法論でどのように世界を読むかについて興味を持っていました。そのようなときに『地球に降り立つ』が翻訳され手にすることができたのです。

一読してみて、地球に足場を持たない人々が地球に降り立つときに、ローカルではなくて、テレストリアルだという主張と、テレストリアルに降り立って、その詳細な調査にもとづく新しい政治を提案していることがわかり、方々に勧めました。しかし、他方では、ラトゥールの独特の方法によってこの書は書かれていて、近代思想の一般的な理解にこだわっていると何を言っているのかわからないということになりかねない、という危惧も持っていました。解説の文書も書いたのですが、改めてその概要を紹介します。

## 5. テレストリアルの発見

ラトゥールは近代の歴史は、ローカルとグローバルの二つの極で説明されてきたが、第三の極があることを指摘し、それにテレストリアルと名付けました。

「グローバル、ローカルの二極が示されれば、近代化の最前線をたどることが可能になる。最前線は近代化指令が描くラインである。近代化指令は、人々がいかなる犠牲をも厭わず前に進むことを要求する。故郷を離れ、伝統を捨て、習慣を断つように促す。『前進したい』なら、開発計画に乗りたいなら、最終的に世界から利益を得たいなら、犠牲を払うことである。」(同書、49頁)

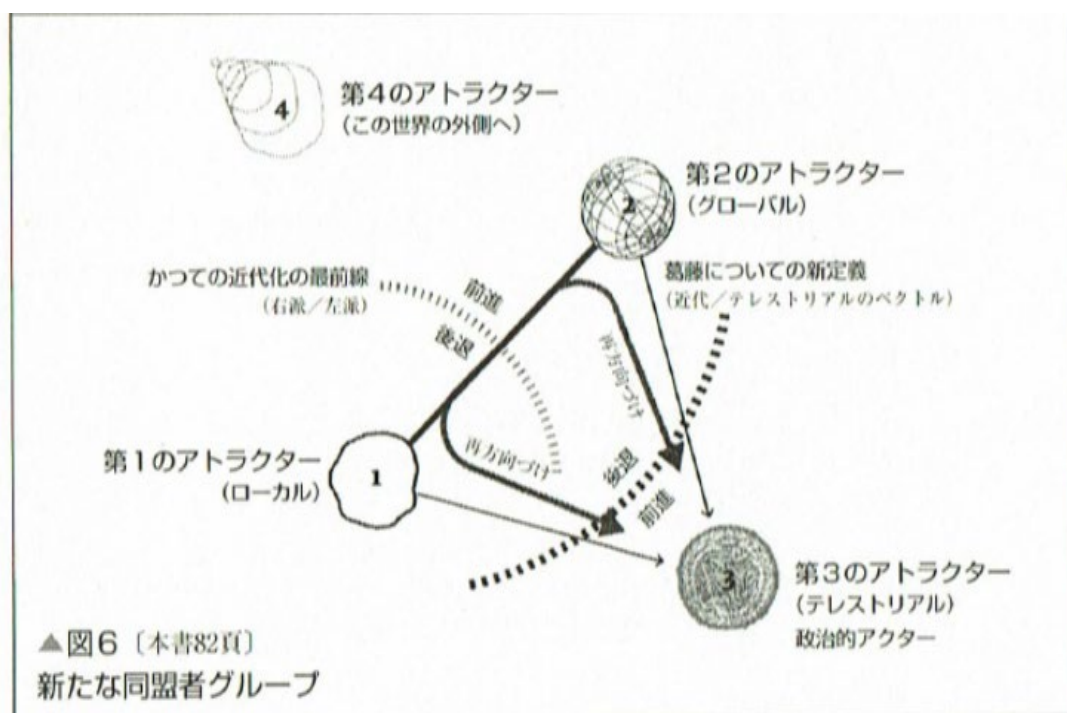
前近代はローカルにうずもれていましたが、近代によってグローバル志向が生み出され、前方に向かって際限なく進むことを指令されているのです。

「突如として、すべての場所で同時に、第三の極（第3のアトラクター）が姿を現した。それはベクトルの脇方向に向きを定め、葛藤の原因となった対象のすべてをくみ上げ、自身のなかに吸収した。そのため、古い飛行経路に沿った方向づけのすべてが無効になった。

今日私たちが立っているのは歴史のこの地点、この節目である。いまや方位もわからない。古いものから新しいものへと至る軸、ローカルからグローバルへと至る軸に沿って様々な立場を配置することもできない。この『第3のアトラクター（引力）』に名を与え、位置を特定し、簡単な記述を与えることすらまだできていない。

ただ政治の新たな方向づけは、脇に踏み出すこの一步にすべてがかかっている。誰が助けとなり誰が裏切るのか、誰が友人となり誰が敵に回るのか、誰と同盟を組むべきで誰と闘うべきなのか。それをしっかりと見極めなければならない。その間に、私たちは、まだ地図に描かれていない方向を目指す。」（同書、56～7頁）

ラトゥールにとっての第三の極（第3のアトラクター）の発見は決定的でした。近代思想の批判や物神事実崇拝について研究していた段階から、新しい政治の創造に向けて舵を切れるようになったのです。つまり、共通の実践の土台を見つけ出したのです。



そして、今回明らかになってきた、第3のアトラクターに名前を付けることによって、共通の実践的基盤の確立に向けて進んでいます。その名前は、テレストリアル（大地、地上的存在、地球）で、本当に大切なのはごく薄い表土であるクリティカルゾーンです。

「今日、私たちが陥っている方向感覚の喪失状態は、どう見ても、応答を返してくれる人間以外のアクターの登場によって起きている。人間以外のアクターは今後も人間行為に応答し続けるだろう。近代化に向かう人々はいま見当識を失った状態にある——いまだどこにいるのか、いまだの時代なのか、とくに自分たちが今後どのような役割を果たすべきなのか、まったくわからないのである。」（同書、68頁）

人間の言葉とはまったく異なる言葉で自然が語っています。それは、多数の力学的・化学的・地質学的・気候的な変化として人間に迫ってきています。

「地球システムは 80 億、90 億になる人類の活動にどのように反発してくるのか。この地球の反発に人類は対処しなければならない。これまでいかなる社会集団もそのような課題に見舞われたことはない。」(同書、72 頁)

これに対する応答の仕方をラトウールは説いたのでした。

## 6. エコロジー運動や左派の運動の限界

### 1) エコロジー運動の問題点

次に、ラトウールは、始まってからかれこれ 50 年になるエコロジー運動の限界について考察しています。

「政治的エコロジーはすべてのテーマに活発な論争を呼び込んだ——それは牛肉から気候変動にまで及ぶ。・・・政治的エコロジーは、どの物理的対象にもそれ自体の『エコロジー的側面』があることを示したのである。」(同書、74～5 頁)

まずは、政治的エコロジーの果たした役割について積極的に評価しています。ところが、ここからもう一步進めなかったのですね。

「近代化かエコロジー化か。確かにそれは重大な選択である。誰もがそれを認める。それでもなおエコロジーは行き詰まる。このことについてもまた、誰もが認める。

世界中どこへ行っても、緑の党は周辺の勢力としての立ち位置を抜け出すことができないでいる。何を足場にして前に進むのか、どうすればよいのか、彼らにはわかっていない。人々に働きかける際、緑の党が『自然』の問題を取り上げると、古典的政党は人権擁護を盾に対抗する。緑の党が『社会問題』を取りあげると、古典的政党は『それが君たちに何の関係があるのか』と食ってかかるのである。

ただ、緑の闘士たちによる 50 年の歴史があったおかげで、右のような二、三の不甲斐ない例外を除き、人々は次の三つの項目、すなわち経済とエコロジーの項目、開発の要求と自然の要求の項目、社会的不公正の問題と生物界の活動の項目について、それぞれの対峙関係を捉えることができるようになった。」(同書、75～6 頁)

エコロジストが何を足場にし、どうすればいいのかということがわからずじま이었다とすれば、何が問題だったのでしょうか。

「エコロジストたちはこれまで右派にも左派にもなろうとしなかったし、時代遅れのでも進歩的でもなかった。ただし、近代人が作り出した時間の矢という陥穽から抜け出すことはできなかった。」(同書、76 頁)

時間の矢という陥穽を共有している限り、エコロジストも近代人だった、というのですが、これだけでは理解できませんね。時間の矢の陥穽の克服は、循環という概念の復活でしょうが、有機農業者たちは循環の意義を知っていたはずですが、政治的なエコロジストがそれに気づかなかったということでしょうか。

### 2) 左派、右派、第三の道という座標軸のリセット

しかし、運動の限界はエコロジストに限りません。その他の政治運動も左右を問わず行き詰まっているのです。

「これまで多くの政党、運動組織、利益集団が『第三の道』を見出したと宣言してきた。第三の道はリベラリズムとローカリズムのあいだ、開かれた国境と閉じた国境のあいだ、文化的解放と市場経済との間に位置する。ただ、どの試みも失敗に終わっている。新たな座標システムを描き出すことができなかったからだ。以前の座標軸は人々の能力を端から奪うものだった。」(同書、77 頁)

右派／左派の座標軸にこだわる限り、政治的に失敗すると見るラトウールは、新しい座標軸を据えることで新しい政治を創り出そうとしています。

「人々はそうした分類が陳腐化していることを知っている。それでも事態は変わらない。代わりになるベクトルがないため、昔ながらの分類をただ使い続けているのである。」(同書、

78 頁)

このある意味での真空状態を認めること、それではダメだと気付くこと、これが新しい政治への出発点でしょう。

ラトゥールによる新たな政治は、反動派／進歩派、さらには右派／左派、という従来の分類と、第三の道のようなその乗り越えの試みが失敗に終わっているという認識のもとに、近代／テレストリアル、つまり近代に、テレストリアルという力の場を対立させることで、二つの派に分類されていた敵対者を説得し、転向させようという試みであり、そのためには「何より優先すべきは、見捨てられたと感じている人々に語りかける方法を見出すことだ。」(同書、84 頁)と述べています。そしてそれらの人々は安心できる暮らしを求めてローカルに向かっているが、それをテレストリアルの方へと方向転換させることが必要だということです。

### 3) ローカルとテレストリアルとの違い

では、ローカルとテレストアリアルの違いはどこにあるのでしょうか。

「ローカルの支持者とテレストアリアルの支持者との間の交渉——兄弟の契り？——は、土地への帰属の重要性、正当性、必要性をめぐるものとなる。ここに難しさの全容がある。『ローカルが付け加えたもの』(すなわち民族的同質性、世襲財産、歴史主義、郷愁、非真真正的な真正性)と『土地への帰属願望』とを早々に混同しないことが重要である。」(同書、84～5 頁)

これは日本では、レイチエル・カーソン『沈黙の春』や有吉佐和子『複合汚染』での告発にこたえて有機農業を志し、新しく大地に着地した新参の農家たちが、在地の共同体との間に様々なもめ事を体験したことを思い起こさせます。しかし、ラトゥールが述べている「混同」は今もって解消されてはいないでしょう。これをどのようにして解消していくのかは大きな課題です。

「とはいえ、今後築くべき同盟関係がどのようなものであれ、既存の政治意識、政治感情、政治的熱意、政治的立場を話題にしている間は真の同盟関係など絶対に築けない。政治意識、政治感情等を作り出してきた現実世界そのものが完全に変貌してしまったからだ。」(同書、86～7 頁)

昔の政治的活動家だけでなく、その同伴者たちにもしみわたっている既存の政治意識、その持ち主たちは、今日運動が行き詰まっていることは認めるのですが、それをみずからの政治意識のせいとは考えないのですね。

「エコロジー政党の出現が遅れた理由もここにある。エコロジー政党は右派と左派のあいだのどこに自分を位置づけたらよいのか戸惑い続けた。右派／左派の二分法を『超越しよう』ともした。しかし超越をイメージするのに適した場所が見つからなかった。一步脇に踏み出せばよいものをそれが思いつかず、グローバルとローカルの二つのアトラクターのあいだに閉じ込められてきた。そのうち現実感覚を失い、最後はもぬけの殻となった。エコロジー政党でさえ行く当てもなく漂流する——それは決して驚きではないのである。」(87 頁)

これは厳しい評価ですが、近代思想の虚妄性を認識しているラトゥールらしいです。そしてラトゥール自身の思想は、やっこの本で政治的表現を得たのですから、これは、いたるところから同調者が出てくる兆しかもしれません。

「重要なのは、新たな同盟関係という舞台装置を想像することを通して、袋小路を脱する力を身につけることだ。『君はこれまで左派であったことがない？いやそんなことはどうでもよい。私も同じだ。私も君のように、根っからのテレストアリアル主義者だからね』。私たちは様々な立場からなる新しい全体的配置を学ばなければならない。しかも極近代の闘志たちが舞台を破壊し尽くす前に、それを学ばなければならない。」(同書、88 頁)

結局、だれか大知識人の思想に頼るのではなくて、テレストアリアルの住民自身が政治的表現をするすべを学ばなければならない、とラトゥールは呼びかけているのです。

エコロジー運動は、自らが立脚するテレストアリアルが政治的アクターであるということ

についての理解が欠け、従来の政治的枠組みのなかで居場所を占めることにとどまって、その枠組みを超えた政治を打てなかった、とラトゥールは見ています。

#### 4) 階級的視点の限界

エコロジー運動についてのこのような批判に続いて、ラトゥールは、社会主義と緑がなぜ結び付けなかったのかと問います。

「社会主義からエコロジーへのエネルギーの伝達はいっさいなされなかった。社会主義とエコロジーは力を効果的に結集する方法を見出すことができなかった。歴史の流れを変えようと共闘はしたが、歴史の歩みを多少穏やかにしたに過ぎなかった。彼らの力が及ばなかったとすれば、それは彼らが、社会問題かエコロジー問題かのどちらに焦点を合わせるべきか、その選択に直面していると思いついていたからだろう。実際には、単なる焦点の選択ではなく、政治の二つの方向性をめぐるより根源的な選択が問題だったのである。根源的な選択肢の一つは、社会問題を狭すぎる定義に閉じ込めたままにしておくという道、もうひとつは、生存の危機を定義する際に人間と非人間との違いをアプリアリには導入しないという道である。言い換えれば、社会は社会的なつながりだけから構成されるとする狭隘な定義を取るか、社会は人間と非人間の連合（それは共同体<collective>と呼ばれる）から構成されるとする、より広い定義を取るかの選択である。」（同書、90頁）

では、その既成の政治的枠組みから抜け出すには何が必要なのでしょうか。ラトゥールの主張はただひとつ、テレストリアルという非人間と人間の連合として、社会をとらえ直すことです。というのも既成の政治的枠組みは、それがなされる場としての社会を、人間だけのつながりとしてしか把握していないからであり、社会を人間同士のつながりはもちろんこと、非人間同士のつながり、及び人間と非人間とのつながり、というようにとらえ直せば、政治の働く場の変容によって、政治自体が変わらざるを得ないのです。

「ならば、問いは次のようになる。社会運動はどのようにしてエコロジー運動の危機を社会運動自身の危機として認識しなかったのか。認識していれば自らの陳腐化を免れたらうし依然、弱体だったエコロジー運動に力を添えることもできた。質問の相手を変えるなら、問いはこうなる。政治的エコロジー運動はどのようにしてバトンを社会運動の側から引き継いで、前に進むことができなかったのか。」（同書、91頁）

ソ連の崩壊によっていったんは地に墮ちた社会主義ですが、しかしその後の資本主義が、資本家のための利益の増大を求めて、資本家が階級闘争を始めるといふ新自由主義を登場させることで、それに対抗する社会運動を生み出しました。その社会運動も、2011年には、スペインの15Mやアメリカのオキュパイウォールストリートのような新しい展開を見せながらも、やはり既成の政治の枠組みから抜け出せていません。

「エコロジーは政党の名前ではない。人々を不安にさせる何かでもない。それは方向転換を求める呼び声である——『テレストリアルに向かおう！』」（同書、92頁）

やっど、ラトゥールが、テレストリアルという非人間と人間とのつながりとして社会をとらえ直し、そこから新しい政治を構想することを呼びかけました。

## 7. 新しい政治の原理

### 1) 生産システムから発生システムへ

この新しい政治の原理とは何でしょうか。

『自然』を離れ、テレストリアル（大地、地上的存在、地球）へと注意を向けるならば、気候的脅威の出現以来私たちが陥ってきた政治的立場の断絶に終止符を打てるかもしれない。断絶こそが、いわゆる社会闘争とエコロジー闘争との連携を危険にさらしてきた。

社会闘争とエコロジー闘争の関係の再構築は、生産システムに焦点を当てたこれまでの分析から発生システムに焦点を当てた新たな分析へと移行することに関わっている。生産



と発生システムの違いは大きく分けて三つある。まず何よりも原理が異なる——前者では『自由』（解放）が、後者では『依存』が原理となる。第二に、人類に与えられる役割が異なる——前者には『中心的役割』が、後者には『分散的役割』が与えられる。最後に関心の対象となる運動の種類が異なる——前者では『機械的作用』が、後者では『発生』が関心の対象となる運動である。

生産システムにおいては、科学の役割と、自然に関する特定の概念——すなわち物質主義（唯物論）——がその基礎におかれている。また生産システムにおいては、政治に対して自然とは異なる機能が与えられている。生産システムの原点には人間アクターと資源との区別がある。根本のところ、自然は単なる背景、その前で人間は自由を享受する存在として捉え、人間と自然にはそれぞれ明確な境界をつくる固有性があり、その境界は特定可能だと捉える。

一方、発生システムにおいては、エージェント（行為能力を発揮する存在）やアクター（他に影響を及ぼしうる存在）といった動的存在が互いに対峙しあっている。これら地上的存在（すなわち複数のテレストリアル）のそれぞれが別個の反応能力を持つ。発生システムとは、生産システムが形づくる物質概念から派生したものではないから、生産システムとは認識論も政治の形態も異なる。また発生システムは、人間のために資源を利用したり商品生産したりすることには全く興味を持たない。地上的存在（複数のテレストリアル）を発生させることだけに興味を持つ。地上的存在とは人間だけでなく、すべての存在を指す。さらに発生システムは、愛着の醸成（愛着を持って互いに結びつきを深める）という考え方を土台に据える。しかしそれを作用させることは実は大変難しい。なぜなら、動的存在は近代化の最前線によって制限を加えられているわけでも、一方の側に押し込めているわけでもないからだ。動的存在はつねに何重にも重なり合い、互いに入れ子状になっている。」（同書、127～8頁）

ついにここでラトゥールは、原理原則に接近します。それは「生産システム」を退けて「発生システム」の原理にしたがうということです。生産システムの原理は、①拘束からの自由（解放）、②人間中心主義、③自然と人間の関係は機械的關係、としてまとめられるでしょう。他方で、発生システムの原理は、①あらゆるものの依存、②自然と人間の分散的役割、③宇宙圏での万物の発生が対象、となります。簡単に言えば、自由・人間・機械的關係としてある生産システムの原理から、依存・分散的役割・万物の発生、という発生システムの原理への転換です。しかし、ここでの「発生システム」の説明もなかなか理解しがたいですね。

『私たちは地上との絆に縛られた存在だ。私たちはテレストリアルのただなかにいるテレストリアルである。』こう主張することは、『私たちは自然の中にいる人間である』と主張するのとは異なる政治をもたらす。二つの主張は同じ布で織られてはいない。あるいは同じ泥からできていないと言った方がいいだろう。」（同書、133～4頁）

ラトゥールは、生産システムと発生システムの違いを、テレストリアルの絆に縛られた人間による自己認識か、自然と区別された人間の自然認識か、というようにも説明していきます。

「発生システムにおいては、すべてのエージェントが、すなわちすべての動的存在が人類の祖先と子孫に関わる問いを投げかけてくる。私たち人類の系統的つながりを招来も長く維持していくためには、その系統についてよく理解し、その系統のなかに自身をどう位置づけるべきかをよく検討しなければならない。」（同書、135頁）

なるほどここまでかみ砕かれると、なんとなく理解が進みます。人間、非人間、物質、等々がすべてエージェントとして、発生システムを構成しているのです。

「生産システムに囚われると、人間だけが革新の力を持つように思えてくる——もっともこのシステムのなかでの革新はいつもあまりにも遅まきなのだが。一方、発生システムのなかにいると、大惨事になる前に人間以外の多くの抗議者が声を上げる。また声を上げることが可能になる。発生システムにおいては、視点だけでなく生命の地点自体も増殖するからだ。

生産システムから発生システムへと移行することで、不公正にたいして反旗を翻す根源

的要素も増やすことができる。結果的に、テレストリアルへと向かう闘争を共に戦う潜在的  
同盟者との出会い、その範囲を大きく広げることができる。」(同書、136頁)

発生システムの原理とそれによる世界の解釈は何となく理解できますが、しかし、これを  
世間の常識にするにはまだまだ課題があります。とりあえずは、生産システムが地球を台無  
しにしているにもかかわらず、それに囚われた人びとはそのことが理解できない、というこ  
とを発生システムの原理に立てば、誰しも人間の生産活動に対する反逆心と怒りが巻き起  
こるでしょう。でもこの怒りをどうすればつなげていけるのでしょうか。

「生産システムから発生システムへの転換を図るには、経済中心の統治から抜け出す方法  
を学ぶ必要がある。まずはシリウスの視点を離れることだ。」(同書、137頁)

ラトゥールの提起はまずは視点の変更です。それによって、生産システムの原理にたもと  
をわかれ、発生システムの原理にしたがうことです。

## 2) テレストリアルからの政治の再組織化

こうして新しい政治の課題とは、テレストリアルからの政治の再組織化だというのです  
がそれはどのような内容でしょうか。

「テレストリアルによる政治の再組織化とは、このきわめて実地的な意味をさす。つまり、  
居場所を構成するそれぞれの動的存在が、ローカルとは何か、グローバルとは何かを認識す  
る独自の方法を備え、また自己と他者のもつれた関係を定義する独自の方法を備えている  
ということだ。」(同書、143頁)

テレストリアルからの政治の再組織化に必要なことは、それ以外のアトラクターである、  
ローカルとグローバルについての批判的認識が前提となります。それらがユートピアだっ  
たとすれば、政治の再組織化のための問題の解明はどのようにしてなされるのでしょうか。

「テレストリアルを手に入れるには、グローバルもローカルもなんの助けにもならない。  
そのことが今日、絶望が蔓延する理由である。広大でかつ狭小な問題群に対し、グローバル  
とローカルに一体何ができるというのか。実に落胆すべき状況なのである。

では何をすればよいのか。第一に、これまでとは違う記述を作り出すことだ。地球が私た  
ちのために用意してくれたものをすべて調査し、目録を作る。それが『人間』であるなら一  
人ずつ、それが『モノ』であるなら一つの存在ごとに、一センチセンチ測って詳細に記録  
を残す。記録をつくらずして政治行動に訴えることなど、どうしてできようか。目録なしで  
も要領よく意見は述べられるはずだし、それなりにちゃんとしている世間的価値を守るこ  
とはできる——そうかもしれない。しかしそれだと、私たちの政治感情は虚空をむなしく攪  
乱するだけで終わる。

見えなくなった居住場所を記述し直そう。そういう提案をしない政治はすべからず信頼  
できない。(記述抜き)の予定表だけの提案はどんな政治的虚言よりも恥知らずなものだ。

もし政治の中身が枯渇し存在していないとすれば、それは底辺にいる人々の声なき声を  
政治のトップが一般的、抽象的な形でしか表象してこなかったことを意味する。底辺とトッ  
プに共通の物差しが存在しないそうした状態では、政治が代理機能を失ったと非難されて  
も当然である。」(同書、144～5頁)

ラトゥールにとっては政治はフィクションであり、自然概念の呪縛に囚われた自然科学  
も虚構でした。ですから、彼の政治の再組織化のための作戦は、まず居場所の記述と、それ  
が要求している諸問題の政治化でした。そのためには、居場所の記述のための調査票づくり  
からまずは始める必要があるでしょう。これは個人の作業を超えていて、さまざまな学会や  
研究会の共同作業が必要でしょう。

「懸案は、第3のアトラクター(テレストリアルのアトラクター)の登場について記述  
し、政治行為に意味と方向性を与えることだ。世界秩序と呼ばれるこれまでの枠組みは崩壊  
へと向かっている。ローカルへと向かう一目散の大逃走劇も開始されようとしている。そう  
した状況が招く大惨事を未然に防がなくてはならない。これまでとはまったく別の、世界秩  
序らしき新たな秩序を築くには、何よりも状況調査に基づく記述を丹念に続け、シェアが可

能な世界像をなんとか描き出すことから始めなければならない。」(同書、151頁)

ラトゥールは、新型コロナのパンデミックによるヨーロッパの都市封鎖に際して、アンケートを作成しています。これも一つの参照事例としつつ、状況調査に取り組みましょう。この調査は、基本的には政府が取り組むべき課題です。最終的には日本政府の調査活動として実施されるように働きかける必要があるでしょう。

## 8. テレストリアルからのグレート・リセット構想

### 1) グレート・リセットは全員が当事者

この構想は、テレストリアルに住まう私たちにとってのすべての諸関係のリセットで、皆さん一人一人が当事者です。以下私の貧弱な想像力で、いくつか例示してみましょう。

雇用されているならば、その関係のリセット。雇われない働き方への移行という問題もありますが、そこまでしなくとも、雇用関係を維持したままでのリセットもあるでしょう。たとえば職場第一主義をリセットして、自身が住まう地域でのアクションを始めるとか。地域での人々のつながりづくりで、例えば都市農業を始めて都市のなかに村を作り出すことなど。

農家にとってはどうでしょうか。農村の共同体は現在でも存続していますが、これはローカルであってテレストリアルではありません。そうすると、既存のローカルのリセットが問われるでしょう。また行政や農協との関係のリセットも必要でしょう。私はかかわっていないので、これについては詳しくはわかりませんが。

自営業の方々はどうでしょうか。やはり住区でつながりを求めているでしょう。特に事業は持続性があるので自営業の方々が、都市での地域づくりの結び目になりうると思われれます。つまり地域の顧客との関係のリセットですね。

このような夢のような望みを具体化できる仕掛けはあるはずですが、それは人びとのこれまでの関係をリセットする意志ある人々が、容易に諸関係をグレート・リセットできるようにするプラットフォームを作ることでしょうか。そこで仲間を探せるようにする。

### 2) グレート・リセットに向けてラトゥールの提起の整理

テレストリアルを陣地に気候変動に対応できる新しい政治を提案したラトゥールの構想を私なりに整理してみます。

ひとつは、人間だけを主体とした既存の社会契約の見直しから生まれてくる、非人間も主体と見なした新しい社会契約の観点から、従来の社会契約への批判でした。

それは近代的な人間論、デカルトの「我思うゆえに我あり」に対置する非人間をも主体と捉えるアクターネットワークとして社会を把握し、主体と対象という二元論を克服する人間主義＝自然主義の新しい人間論の措定でした。

基本的人権もこのような新しい人間論からの再措定が必要で、テレストリアルの存続にかかわる諸課題を構想しうるようなものへと更新されるべきでしょう。

議会制民主主義についてはモノの議会が提案されていますが、フランスの気候市民会議のような具体例が現れています。

緑の政治とその左翼との連携の不十分さへの批判もありました。左翼の階級闘争論 特に外部注入論とイデオロギー闘争至上主義への批判として、生産システムへの依拠から発生システムへの依拠への転換が提案されました。

そして私から見て一番重要なのは、新しい政治の中身です。ラトゥールは、従来の左派の政治を「支配者なしで生きる」というようにまとめ、これに対して「支配性なしで生きる」という新たな政治を提起しています。支配者なしで生きるということは、現在の支配者の打倒という課題を提起し、自らを支配者に高めることとなり、ロシア革命がその実例で、左翼はこの政治を今もひきずっています。これに対してラトゥールは、「支配性なしで生きる」という新しい政治を提起したのです。

### 3) 人びとがグレート・リセットに取り組むとき

第四次産業革命の推進力を資本や国家からリセットすること、これが基本です。それは、デジタル経済の推進主体をリセットすることでしょう。このデジタル化とは実はベックが指摘した「サブ政治」です。技術革新による新しい生産物が議会で議論されることなく社会に登場してきます。GAF A のプラットフォームもそうで、今になってやっと国家は規制を始めています。そして、第四次産業革命のデジタル化は人の身体を対象とした様々な装置（アップルウォッチやグーグル眼鏡に始まり、身体にマイクロチップを埋め込むとか）も登場してきます。これが何の政治的議論もなしに実用化されていくのです。

しかし、惨事が自然災害や原発事故ではなくてコロナ禍であるということで、ショック・ドクトリンを狙う相手に対して、逆にこのグレート・リセットというサブ政治に対抗できる可能性が開けています。

このような動きをリセットするためには、孤立した個人ではなくて、連合した人々が相互につながる必要があります。この連合は、政党や労働組合のタイプではなくて、事業家の連合として構想することが大事でしょう。そしてそのためには、共通の旗印が必要でしょう。それがテレストリアルからのグレート・リセット構想で、それが障地としての引力を發揮できるようになるでしょう。